

翻 刻

〔翻刻〕 鷺流問書抜(一)

稲 田 秀 雄

ここに翻刻するのは、山口県立大学郷土文学資料センター所蔵『鷺流問書抜』(外題による)である。本書は、郷土文学資料センター所蔵の鷺流関係資料の一環をなす間狂言台本四種の一部である。間狂言台本四種のうち、山口鷺流の元祖・春日庄作の自筆になる『鷺流問集』(一)〔翻刻〕鷺流問集(一) (二)〔山口県立大学大学院論集〕5、6、平16・3、平17・3)及び『鷺流語り問書抜』(一)〔翻刻〕鷺流語り問書抜〔山口県立大学国際文化学部紀要〕16、平22・3)はすでに翻刻した。本書も、その特徴的な筆跡から、同じく春日庄作の自筆と認められる。以下に簡単な書誌を記す。

写本一冊。外題「鷺流／問書抜」(表紙中央に墨書。本文とは別筆)。内題「第参號(朱書)／アシライ／問言葉書」、内題の左下に「本主」と墨書あり。表紙(ポール紙)は後補。袋綴。料紙は楮紙。縦十一、七センチ、横十六、三センチ。一面行数、十〜十三行。全八十一丁(遊紙なし)。印記なし。奥書なし。後表紙には「中西藏書」と墨書があり(本文とは別筆)、春日庄作の孫弟子に当たる中西治郎の蔵書であったことがわかる。

既翻刻の『鷺流語り問書抜』が専ら語りアイの詞章を収めているのに対して、本書は「砧」以下三十九曲のアシライアイの詞章を集めたものである(最後の「関原与市」については、目録でも本文でも番号が付されておらず、後から追加したものである)。これで鷺流狂言記録作成委員会編『山口鷺流狂言資料集成』(山口市教育委員会、平13)に収めることができなかつた春日庄作自筆の間狂言台本はすべて翻刻・紹介されることになる。

鷺伝右衛門派の間狂言詞章としては、実践女子大学常磐松文庫蔵『問之記』がすでに山本和加子氏により翻刻されている(『鷺流狂言伝書』問之記)(一)〜(三)、『実践女子大学文学資料研究所年報』7〜9、昭63・3〜平2・3)。本書所収曲のうち、それに収められていない曲は、「砧」「吉野天人」「合浦」「黒

塚」「綾鼓」「大仏供養」「恋重荷」「紅葉狩」「鞍馬天狗」「安宅」「唐船」「接待」「三井寺」「船弁慶」「大江山」「草紙洗」である。
なお紙数の関係で、翻刻は二回に分けて行う。今回は、「砧」から「紅葉狩」までの十九曲分を掲載する。

〔凡例〕

- 一、基本的に原本に忠実に翻刻することにしたが、読解の便宜上、以下のような措置を施した。
- 一、漢字は原則として、新字体に統一した。
- 一、繰り返し記号(踊り字)については、二字以上の分は「く」、一字分は、漢字の場合は「々」、平仮名の場合は「ゝ」、片仮名の場合は「ゝ」に、それぞれ統一した。
- 一、合字の「夕」は、「より」に改めた。
- 一、句点を打つべき箇所は一字空きとした。原本に区切り符号(句読点に相当するもの)が記されている場合にはそのまま翻刻した。
- 一、極端な当て字または誤字のため、その語の意味が分かりにくいと判断される場合は、正しい漢字を括弧に入れて傍記した。
- 一、原本に訂正(抹消・補入)のある場合は、訂正された本文のみを翻刻した。
- 一、場面(内容)によって、適宜段落を分けた。
- 一、演出に関する注記はおおむね二行割注になっているが、印刷の都合上すべて一行に統一し、ポイントを落とすことで示した。
- 一、目録の曲名の上下に記された三角及び丸印は、「△」「○」によって示した。なお目録の曲名には、鉛筆で「✓」の印が付けられているものがあるが(意味は不明)、その印については翻刻を省略した。

一、問題のある個所については、適宜注を施し、その内容について末尾に記した。

【表紙】

鷺流

問書抜

【内題（二丁表）】

第参号（朱書）

アシライ

問言葉書

本主

【目録（二丁表～二丁裏）】

一 礎	二 吉野天神 [△]
三 合浦	四 黒塚
五 愛染川	六 竹ノ雪
七 正尊	八 土車
九 綾鼓	十 藤戸
十一 舍利	十二 大仏供養
十三 恋ノ重荷	十四 鉢ノ木
十五 檀風	十六 千引
十七 盛久	十八 鉄輪
十九 紅葉狩	廿 鞍馬天狗
廿一 安宅	廿二 烏帽子折
廿三 唐船	廿四 卷衣
廿五 西行桜	廿六 護法

廿七 百萬	廿八 住吉詣
廿九 接待	卅 班女 [△] ○
卅一 高野物狂○	卅二 弱法師
卅三 三井寺	卅四 放下僧
卅五 籠太鼓○	△卅六 船弁慶○
卅七 大江山	△卅八 草紙洗○
関原与市	

【本文（三丁表～）】

一 礎

「扱も只今の躰ハあわれな事て御座る 只々かり染に御上洛有我等こときの者の存るニハちかき内に御帰り被成るへきと存今や〜と待所にも早三とせもおよふまで御帰りなけれハ女人の身ニテハ恨ミに思召スハことわりて御座る それにつき里人の礎を打ツ音を聞たまひかのもろこしの蘇武^朝が故国に有し時古里の妻子かうろふに登り礎を打シに其心中に通したる事を思召出され少シのうきはうせんと礎を打なくさミたまふ処に夕きりニ申たるハ殿にハ此年の暮に御かへりなきよし申されけれハ弥なけきしつみついにむなく成りたまふ 左有によつて此よし告知らせ申そふづると存罷出た いそいで参ふする 都ニハか様の事を夢ニも御存し御座るまい 此よしを申てあらハ定めて御なげき被成るてあろふ

参る程に是じや いかに申候 古里ニテハ久々御帰りなきをなけきついにはかなく御なり候 此よし御申有て給り候え

二 吉野天神[△]

是ハ和州吉野々山に住ム者ニテ候 扱も当山の桜ハ世にかくれなきにより毎年花のさかりニハくんじゆ致事中々申スもおろかにて候 それニ付都人花見とて若き人を供ない来り爰々かしこ永め申されたるにやことなき女姓[△]のみみへし程にいか成人そとふしんのなし被申ければ我ハ上界の成るか今宵ハ爰に旅居して待チたまへいにしへの五せつの舞今日の夜遊にまなびてみせ申さんとかりうびんかの声ばかりしてうせたまふと承る か様のためしすくなき事おハ諸人存る

間敷候間此よしを申聞せばやと存る やア〜皆々承り候え 当山ニおみて上界の天人夜遊をまなび被申る、問老若男女共に罷出拜し被申候え 相かまえて其分心得候へ〜

三 合甫

「是ハ此浦のりうし(く)にて候 今日た一段の能いなきにて候間罷出釣をたればやと存る ア、よひなきじや ヤツトナ されハこそ掛たハ〜さらハ持てかへろふ シカ〜「イヤ此魚を何と言うそとおしやるか シカ〜「是ハねふりぎりちよと申魚にて候 シカ〜「何と此魚を放せ シカ〜「イヤ此方ハむざとした事を被仰る、此魚をはないてよひ物で御座ふ せい出して釣た魚で御座るぞや シカ〜「イヤ夫しならハはなしましよふ 目出度事にて候間いそいてはなし申そふづる ひた〜 あれ見させられ うれしかつて参りまする 「心得申候

「然れ共此処にくわんじやうし奉るに俄の事なれハ持チたる扇子を御幣と定よき方にむかつてのつとを参らせむ きんしう(く)さいはい〜 あそこもさいはい爰もサイハイ〜 五百八十萬々年 目出度候 我ハ御暇申候

四 安達原

「扱も〜今迄何ほと宿おもこよひのあるじ程の心のやさしい人ハ御座らぬイヤ先ツあれ江罷出う 何と先達ニハ御草臥にて候 「扱々只今あれにて独言に申て御座るか今宵の様な心のやさしいあるじハ御座るまい 誠に先達ツを初め我等ことき者迄も陸奥の安達原そとやらむに今日初めて参り俄に日ハ暮て何と致いてよかるふやらと存る処ニ火のあかりをしるべに行キ宿をかるふと仰せられければこそ参らせうと言てかされた時のうれしさハ某の一世の内ニハ覚ませぬ シカ〜「御尤て御座る 殊にいろ〜の御たわむれ等を申されて心をなぐさめられ其上殊之外夜寒に候程に上の山江登り薪を取り火に焼キあて申さふづると有ルを先達ツハ夜陰に女姓(く)の身として御無用と御留めなさるれともイヤいつも通いなれたる道なれハくるしからぬと有て参られた心中ハ去りとてハためしすくない事で御座るか先達ツニハ何と思召れ候ぞ シカ〜「左様で御座る某ハあまりの不思議(く)に是先達の行力か達し給ひたる故ニこおふ善神か一言主の御神のかりにあるしと現じか様に御池走被成たるかと存候 それニ付不測な

事か御座るハ シカ〜「イヤあれ程ニ奥そこものふ頼母しい心のやさしい主の我等ことき者ニ申さる、ハ理りて御座るか何か先達程の行者の人江行く者か立かへりてかまえてわらわがねやの内ばし御らんぜらる、など急度ことわられたハ不思議な事て御座るか先達ニハ何と思召そ シカ〜「イヤ此方ニも左様に思召か イヤ何をかくいておかれたか ちよと参つて見てかへりましよ シカ〜「イヤ此方ニこそ御約束は被成たれ 某ハ約束ハ致さず 只々私のそこつて見て参りましよ シカ〜「ア、シカ〜「イヤどち江も参りハ致させぬシカ〜「イヤ何も致ませぬか ア、扱々おそろしい夢を見て御座るが何者やら引立て参ルと思ふ様に御座て覚え立たそふに御座る 「ハア、 「ア、明かりが有てまふうてねられぬ つ、 、口伝多シ 「ア、うれしやの〜 イヤあの先達ツハ行力も殊の外よし赤心立も随分よい人じやか爰にたつた一ツわるいくせか御座るハ 何そ是をこふ致そふと申すとおふよかるふと言われた事か一度でも有ツた事かない イヤ又某もあまりいぢかよいでもおりない イヤ是もこふしてくれいと人の頼む事ハいやなり 人の留る事致し度い イヤ是もいて見てこひとおしやつたならハア、くたひれたにいらぬ事と思ふハ なみそなみそと云うて御留やるに仍て無理に見度うてならぬ よし〜ちよと見てこう

「ア、かなしや〜人のもの、やかいなか此辺りから幾つもふつり〜とくひ切て有ル 是ハしらぬかほをしてハ居られまい いそいて申そふ がア日頃某をバおくひやうしや〜と仰せらる、程にとくつと見届けて申上ふ イヤ此度ハ何共参るハこわものしや イヤとうがふるわれてならぬ 口伝 「ア、かなしやほね〜 見て御座る

「イヤあるしの寝やの内をなみそ〜と被仰らるれとあまり不思議(く)にそと見て御座れハ人のかひなやも、が此あたりからふつり〜とくひ切てあり 亦山伏の爰かときんをきながら幾つも御座候 いそいて御らん候え

「中々いそいて御出て有ツて御らん有れかし 某ハ御先江参りニ御宿を才覚仕ふつる ノう〜助りや〜

所さ先ニ段目 一先ツアクラカキねるてい 横はいにはい立掛ルとワキ言葉有 「とこへも参りハ致シマセヌトコタエル 二段目 ワキノ方ヲ見亦つレノ方を見テそろ〜立掛ケ而ひよるツキントトゆわする ワキ言葉 「夢ヲ見たト云ウ 三段目 火をけしみをよせワキ亦ツレノ方聞足ヲぬべソロ〜ころび立掛り江入無地のし目 水衣 キヤハンく、る かうし頭巾

五 愛染川

「誰にて渡り候ぞ イヤ左右(右)の丞(右)にて有か シカく「神主殿ハ持仏堂にかんきんを被成て御座るか其文ハいつ方江参る文にて有ぞ」「左有ハわらわ、持テ参ふつるぞ」「イヤくくくるしからぬ事 此方江渡し候え

「神主殿に御目ニかくる間夫ニしばらく待チ候え 都より下りたる女房の文とあれは心元ない程にわらわかそと開じて見うと存る されはこそなうはら立やハ一とせ神主殿の御在京の時分なれまいらせし女かあまつさへ梅千代とやらむ子まで連れて来り為るとハ腹の立ツ事かな 何としてよかるふぞ いやく是を御目に掛てハいか、な程にわらわか別ニ返事を致そふずる ト太鼓座の前ニ而

文をふとこるニ人外の文を持テ立

いかに左右(右)の丞 「都より下りたる女房子を連れて来りて有か」「其名を梅千代と申か」「神主殿以テの外(右)の御腹立にて中々御返事もなくいそぎ其女を此所をおいはらへとの御事にて有ぞ」「のふくく女房も子をも当所をおひうしない候え 左右(右)の丞畏テ候ト言テ文を請取 女ハ渡スト葉ヤ江入ル 女立ハはく物 さけ帯 上にはくつほ折にしてびなん末広持 左ノ袖口ニツゆひにて持

六 竹の雪

「みつからを呼せらる、ハ何の御用で候ぞ」「何と御物もふてと候や 竹の雪の事ハ心得申候 亦月若殿の事をいたわれと仰せ候 一つの御留守ニてもみづからが月若をいたわらぬ事の候ぞ やかて目出度う御下向候え

「扱もく腹の立ツ事かな 亦月若かつけ口をしたと見えた 葉ヤ江向ヒ ノうノ

月若の渡り候か 申へき用事あれハ急て出られ候え 子方出る ア、はら立やはよふ参られ候え」「なう月若殿 御聞候え 父ハ四五日物詣御出候 御留守の間月若殿をよくくなくさめ申せと被仰候 一つの御留守ニてもみづからがあしいさまにあたりたる事ハ候らわぬか何とて左様なむりをば仰せらる、惣して左様に御申候ハ、只々よの常にて置申敷敷ぞ かまえて能心得候へ あのかほわひの なふはら立やく ト言ウて葉ヤ江入 亦諷の留メニ出ル 供ラッレテ一ノ松ニテ諷ハ 親子ならでハかくあらしくト言ウ諷の留メに出テ 「あらふしきや 月若か見えぬ 何

所江いて有ぞ 定而長松(右)の母の所江行たる物て有ふ 扱々腹の立ツ事かな いかにか誰か有 供出シ「月若か見えぬ 定而なかまつの母の所江往て有べし 汝行て連れて来り候え わらわ、呼ぶと有ハ来る間敷間殿の御めし被成る、と申て

いそいで呼じて来り候え ト言ウて太鼓座江くつろぐ 供子方掛合い有て子方太鼓座来る して中人作り物出

「扱々ひまの入事かな 何としておそいぞ 腹の立事かな」「いかに月若よひ所か有ルとおもひて長松江ハ何として行ぞ 長松にてさぞみづからが事をのミ申シつらむ 腹立や 何としてくりふぞ イヤ父、子の仰せ候ハ上のきぬをぬき小袖一ツにて竹の雪を是を持て此四へきの竹の雪を払ヒ候え ちつとも雪かたまりたらハ能い事ハ有間敷ぞ かまへて其分心得候へ かれを何としたもので有ふ 下掛トリキハワキツレワキ出ル

同供

「御前ニ候」「心得申候 いかに案内申候 是に月若殿の御座候か 殿の御召シニテ候 急テ御出候え」「いかに申上候 月若殿を御供申て候

後ニ「何と申ぞ 月若殿竹の雪を払ヒたまふとて雪に埋てむなく成り給ひたると申か あ、らいたわしや 頓テ長松え参り此由を申さはやと存る シテ方エ行て いかにか案内申候 月若殿四へきの竹の雪を御払ヒ候とて雪にうもれてむなく成りたまいて候 夫レく御申候え 右ハ北流のアシライ 宝生流ニ而ハ所々違ひ有リ 上懸りのワキノ時ハ狂言供ニ而出る 其時ハ狂言上下

七 正尊

「御前ニ候」「畏て候

扱もくかり染ながら大事の御使に参る事て御座る さいせんかむろを二人つかわされ候か今に帰り申さぬにより又わらわに参れと被仰付た 其子細ハ此度正尊熊野詣といつわり我君の打手に参りしを武蔵殿を御使にニて正尊に参れとあれハ風のこ、ちのよし申を武蔵殿ハ正尊をやにわに引立御前ニつれ行色々御せんぎ被成候より正尊当座の難をのかれんが為におそろしききせうをした、め君江さし上御盆を下されかへられたるが武蔵殿猶もあやしく思召シわらわに正尊が屋形を参つて見てこひと有かはハ女ニハ人の心をゆるさる、により童に被仰付た 女ながらも大事の御使て御座る おそろしうハあれとも参らずハ成るまい いそいで参ふ ト言ウて小廻りシテマクノ方ヲ見 イヤ是ハ正尊か屋形と見え 伊ヤ其件のにぎやかなハ何事ぞ ト言ウて橋掛江行 下を見て 何と式人のかむろ

を切りころしたると申か 扱々恐しい事かな ト言て前ノ方ヲ見テ 正尊か屋形ニハ馬物のくをしちちをたいし長太刀を横たへおびた、しいていじや いそいで申上う ブタイエ出ワキ江向ヒ いかに武蔵殿江申上候 正尊か家形を見て参り候か 最前参り候式人のかむろを切ころし物のぐをしちちをたいし只今夜打の仕度致シ打チ出ると相見え申て候 御ゆたなく御用意有て然るへう候 ト言て立業ヤ入 「ノウ恐しやく」

女常之通 上カ、リニ而ハワキ弁慶 喜多流ハワキなし シテ弁慶 正尊ツレ

八 土車

是ハ信濃国善光寺の住僧に仕へ申沙祢(沙)ニて候 いつも之通り今日も仏前のさふしを致さふと存る ト言テ笛の上ヘ付 ワキ出諷すミテ して出 大臣桂付ト子方シテ出 口伝有リ 「イヤ是成人ハ 物狂いの躰と見えて候か是ハ内陳(内)ニて候 左様之者ハ内陳(内)の事ハ扱置天下ニハ叶ウまい 「中々

シテ諷有て二天四海なミ 老人りせかせたまふカ 口伝有リ 無地のし目 狂言榜キハンく、ル こし帯 ヘントツ がうし頭巾

九 綾鼓

「御前ニ候 「畏て候 いかに此家の内に御庭はきの老人の有か 上より召れ候間とうく出テられ候えヤア

シテ出舞台江入る いかに申上候 御庭はきの老人をめて参りて候

中入過テ 扱もくいたわ敷事かな 恋の老人鼓のならぬ事を悔ミ桂の池江身を投候 其子細ハ此所に桂の池とて名池の候 亦庭帯老人の御座有 いか成折にか女御の御姿を見奉り心なし恋と成るを忝くも帝聞(帝)シめしおよはせられ恋は上下にかきらぬ事なれハ老人か心中を不便に思召彼ノ池の辺の桂の木枝に綾ニて張り為る鼓を掛ケ置恋の老人に打せられ其鼓の音くわうきよに聞えハ今一度御姿をまみへさせ給んとの御こと成ル間老人悦ビ打チ候へ共少シも音の出さるを若シ耳のきこへぬゆへかと打聞とも常の鼓さへ打チ付ぬにましてや是ハ綾にて張し鼓なれハ打ッ音ハすれと更にならぬに仍てかくて女御を見奉る事も叶わぬハ生てもかいなきと存シそは成池江身をなげむなく成りて候 彼ノ者のしうしんの程もはかりかたく候えハいそき此よし申上ふと存る ワキノ方行きていかに申上候 御庭ばきの老人綾の鼓のならぬ事をうらみ桂の池江身を投空敷

成て候 ぞと御出有て御覧あれかしと存る 出立 長上下 小サ刀 扇子持

十 藤戸 ワキ呼出

「かたくのしうたんな尤なれとも爰ハ御前じや 先ツ御立ちやれ 実ニと成人の子を失ひなける、事ハ道りなれ共はや帰らぬ道なれハ此上ふつりと思ひ切しませ 生者必滅の習イ愛別りくのことわり元来天命かきりあれハ一人成共残りとも、まり後生ほだひをとわれんこそ幸ひなれ ひと女が一燈とかや申せば心ざしの切なるにおよんでハ諸仏もいかでか納受したまわん 近頃のくり事ながら五せう三ちう(三)の御身なれハはやくしやか大師(大)のゆいていニそり童女か成仏(佛)有とさんしよ六こんのさいせうをさんげして一すしに九本の蓮(蓮)たひにいたらん事をいのり一念の戸細を開きたまへ 亦何経とやらむニハ善智敷ハ是大因縁ととかれたり 彼浄蔵ハ生れて父のちしきたり 是ハ母の為にちしきとおもわれかたくの後世を大事との願さかさまなれとも我が子の無跡をも申たまへ亦今ハ頼た人も別してふひんに思召ス間跡をも申らむ妻や子おも世立せらる、程に某の御取成シヲ申そふつる間(間)いもなけかすと私宅江おかへりやれヤア

十一 舍利

「誰て渡り候ぞ 「惣して 泉涌寺(泉)の仏舍利ハリようじに取出ス事ハ成不申候去りながら当月た某の戸を開く番ニて折節かきを持チ合せ為と申 ことに今日ハ御舍利を日なれハ先ツ戸を開き仏舍利を拜せ申其後大唐より渡りたる三ツの十六羅漢を御拜せ申そふづる さあらハかふく御通りあるふづる ト言ウて作り物の戸を開キ 御戸を開キ申て候 御心静に御拜ミ候え ト言テ太鼓座付 ヤカテ天正を打チぬキ諷ノ時口伝 桑原くく ア、今氣か付たよ 扱只今のめりくとうと鳴たハ何事て有ふよ 神鳴かと思ふたれハ夫レてハなかつた 何かなつた事かしらぬ イヤ是ニ付ても後生か第一じや 愚僧ハ菩提の道をハ随分心掛ると存したれど今の鳴た時ハ仏共法共わきまへのなかつたがイヤ兼て心懸か肝要じや先ツ舍利殿江参つて見よウ ア、ラ不思議や いつもより内か明いか 何とした事じや ヤアく此仏舍利をハ何者やら取てとち江やらにけた ア、今おもひ出した さいせん出雲の国三尾の関より登られたるあの悪僧か取て逃た物て有ふ 扱も腹の立ツ事じや いそいで追掛ウ イヤ未是にたまつて居らる、よ のふく方々ハと、かぬ人しや いそいで仏舍利をおかへしやれ シカく

「イヤ知らぬとちんしたりとも知らせておくまいぞ シカク「実ニとおしやれハそふじや 此方のおとりやつたならハ爰元ニハおりやるまいよ 御僧の御心中ニ只今ハきつい詞を言うた思召りよふか 此泉涌寺の仏舍利申ハ釈尊の御入滅の時八万の大衆ハ申に及す五十二類迄もなげき折節足りキと言う足早キ鬼か成仏のそくわいとけんと思ひ仏の御は引き行方知れすこくうにうせけるを伊達天と言本尊ハ仏にふくを備へる時ことに三部の三ツつ、内に一ツ打内に三千世界を行 二ツ目ニハ本地江御帰りに有程の足早キ伊多天のおひかけたまへハ疾鬼ハ須弥を七返順に逃廻るを伊多天ハきやくに廻りておひ付おさへて持たまふを去ル子細有て当寺の御宝となりし釈尊肉付のげ舍利なれハ常に御戸を開申さぬに今日ハ御出シ有ル日なれハ取出シかた／＼に拜せ申て置為をか様に何方知れすとられてめいわく致したるか 扱ハ御僧の御座候内ニはいか様成者か参りて候ぞ 「何と只今あやしき者の来て御舍利を取て天井をけやふりこくうにうせたと被仰る、か 扱々ハ何としてよかるふそ いつもより内かはれやかなと思つたれハ道理じやよ あれを見るに付けても弥御僧の御存シないか知れた あの方井をやふりたるていハ人間のわざとは見えぬか いか様成者かやふりたるそ 「被仰る、通りいにしへの足リキか今にしゆウしんをのこし此度ハ人間と現じ取て行たるもので御座ふする 夫ならハ人力の分にてハ成るましく候程に幸い伊多天か守り本尊なれハ彼ノ仏に祈せしめて二夕度取返し申そふする 左有ハ旁も力をそへて給り候え 「一心頂礼万徳円満釈迦如来信心舍利 此度疾鬼のとり行たる仏舍利をとり返シ二度此寺の御宝となしてたひたまへ 南無伊多天／＼／＼」

十二 大仏供養

か様に候者ハだひごのしゆんしうほうに仕へ奉る者にて候 扱も大仏殿の所領成るニ付今日た東大寺ニ御座候 さる程に大仏殿成就仕るによつて則チ今日吉日なれハ御供養有ル 夫ニ付鎌倉殿も唯今御参詣被成候間其道筋の人家に相触レ候えとの御事なれハ取る物もとり合へす是罷り出候 ヤア／＼此辺りの人々承り候えハ鎌倉殿の大仏供養に御参詣被成むとておし付此処を御通り候間みな／＼構而罷居り候え 相かまへて其分心得候へ／＼

十三 恋ノ重荷

「御前ニ候 「畏て候 是ハ思ひも寄らぬ御使を仰せ付た 先ッいそいて山しなのしふじか宅江参ウと存る か様な事の出来仕うとハ努々存せなんだ 参る程に是じや いかに此内ニ山科の庄司の有るか 上よりめされ候間と／＼御出候えヤ

「いかに申上候 山科の庄司をつれて参りて候

「是ハいかな事 にか／＼敷い事が出来致いた 只今承れハ山科の庄司ハ重荷を持兼むな敷なられたると申ス間彼江参り見申そする 是ハしたり 両舌かと存たれハいたわしい事かな 去りなから此よしを申上う 「いかに申上候 山科の庄司ハ重荷持チ兼むな敷成申されて候 彼の者のせいこんの程も恐敷キ御事にて候間そとしかひを御覽被成候え 「さん候

十四 鉢ノ木

「御前ニ候 「畏て候 是ハいかな事 此中御じんふれを仰せ出された いか様な事そと存たれハ物の具を御きんみ被成りうとの事しやと見えた 扱も／＼きらひやかな出立かな 此中に被仰付たたる様な仁ハ シテノ方ヲ見テ も無い 是レそふな いかに申候 御前江召され候間御出候え 「イヤ慥に方々の事にて候 則チ被仰出たハちきれたる腹巻にさひたる長太刀をよたへやせたる馬を自身に引かへたる武者と被仰出たるか方々程物の具のふざれな人ハ外ニハ御座なく候間いそキ御前江御出候えヤア 狂言袴く、ル 腰帯 かんにん頭巾 小サ刀

十五 檀風

「御前ニ候 「畏て候

「案内とハ誰にて渡り候ぞ 「さん候 めしうとのゆかり対面ハ堅キ法度ニテ候え共おさなき人を御同道なれハ御機嫌の以て申そふつる間しはらく夫に御待チ候え 「いかに申上候 今熊野なききの木の房にそつの房ノあしやりト申ス山伏の助友の子にて有るとておさなき人を御伴ひ有則チ対面有度由被申候 「尤左様にて候え共介朝の卿の御事ハ別而御いたわりと見え申候間扱申上候 「畏て候 一段の御機嫌に申合いて御座る いそいて此よし申そふづる 最前の客僧の渡り候か 「其由申て則対面有ふずるとの御事にて候間こ／＼御通り候え

十六 千引

「御前ニ候」「畏て候

いかに申候 此家の内ニハ人もなく候か 女シカく「是ハ何某殿の御使ニて候 此所の千引の石を他国江引出シ千々に御割有へきとの御事ニて候間トウく出テ石御引候へ 女シカく「たとへひん女なりとも御引ないにおゐてハ此所に置申事ハかのふまいとの御事ニ而候 トウく御出有て石を御引候へ ト言テフレル皆々承り候へ 此所の千引の石を他国江引出シ千々に割捨有べく候間上は六十下モハ拾五才をかきり男女によらずいそいで石を引かれ候え 相かまへて其分心得候へく

同 立チ

「か様に候者ハ此辺りに住居いたす者ニて候 去ル程に我等の是へ出ル事余の儀にあらざ 扱も此所ニ千引の石とて隠れなき大石の候か皮石にたましい有て年々人を取る事かぎりなし 左有に仍て甲斐の何某殿よりの被仰出ニハ男女ニよらず罷出其石他国江引出シ千々に割捨テよとの御事ニて候間皆々をよひ出シ石を引かうと存る マクノ方向呼出ス「なふくいづれもおりやるか」「何事ぞ」「別の事でもない 千引の石を他国江引出せとの御事しや 若シ引かぬにおゐてハ当所の住居ハ成ましくとの仰せ出されじやよつて石を引かうでハないか」「是ハめいわくなれ共仰せ出たされた事しや程にいそ引かう」「サアくは是江おりやれ」「心得た」「よいか」「中々」「よいとも」「さらハ引そ」「よかろう」「エイサラエサラく」「エイト言うてハゑいく」「エイくく」「イヤ是は殊の外おもひ事てハないか 其通りおもひ事じや 是ハ中々いこく事てハない にかく敷など言うてしあんする 又二三ハん言ウ時ニ女言葉ヲ掛ケル 是ハシテ方言イ合せ ヲモ「何と此石を方々壱人して引うずると御申候か 女シカく」ヲモ「其よし申そふする 暫それに御待候え ト言テ太刀持江 いかに申上候 太刀持「何事ニて候ぞ ヲモ「あれ成女か此石を壱人りして引うずると申候 太刀「其よし申そふする間面々は私宅江帰り休候え」「心得申候 イヤノウく今この通りを聞かしましたか 一刻も早う帰ろふ」「よふおりやろふ」「サアくおりれく」「参るく」「ノヲノうれしやく」太刀「いかに申候 千引の石を大ぜひにて引候え共少シもうごかず候を女の来り壱人りして引かうすると申候」「尤ニて候 太刀持狂言上下キヤハハンくゝる 小サ刀 後ノ間出立同断 ク、ル

候 此所の千引の石を他国引出千々ニ割捨テ有べき御事なれハおこと出て引候へ 左様候えハ人をやとふて引せ候え たとえひん女たり共御引なきニおゐてハ当所の住居成ましく候 何国成其早々御立のキ候え 太刀「ト言うて後ふれる也

一寸一服シ聞掛テ 天明三卯ノ八月十一日客徳院様思召ニてシテヲ遊ハシ候 宝生流松原弥治郎御取立テ申上首尾能相濟 此間中村平左衛門相勤メル

十七 盛久 めしニしたかひ盛久ハ鎌倉殿参りけりく

諷有シテ太鼓座江クツロク

「去程に主馬の判官盛久ハ囚れ人と成て当国江下り給ふ 土屋殿の預りニて様々いたわりたまふ所に大事のとか人なれハいそきちうし申せとの事ニてぜひにおよばず由井の汀へまかりすでに太刀を振り上ケうたんとせしに太刀ハ式ツに折れて盛久おもわず命を助りたまふ 扱も不思議な事と存る処ニ盛久ハ常ニ觀世音をしんじ毎日おこたらず御経をどくじゆ被成候か定て其御利生ニて御座有ふする イヤゆわれぬ壱人言をゆわずと先ツあれ江参ふする 扱も只今ハ不思議成事ニて御座候 「さん候」「被仰る、ごくとく盛久ハ日ころ清水の觀世音のしんじ給ひいつもおこたらず觀世音経をどくじゆ被成し故ニうたかう所もなき其御利生ニて御座有ふつると存候

「心得申候 いかに盛久江申候 土屋殿の承りニて烏帽子した、れをめして早々御前江御出あれとの御事ニて候 初メより出ル時ハ狂言上下 地江とり出ル時長上下

十八 鉄輪

「か様に候者ハ貴舟ノ宮に仕え申社人ニて候 去ル程に某シ今夜不思議の夢を見申て候 都より女の当社江丑ノ時詣てする人の候間則チ叶えて参らしつとの御つけにて候 其女に金輪三ツの足にたいまつを立て頭にいた、きかほに二をぬり身ニハ赤キ衣を着しいかる心を仕れと慥ニ申渡せとの御告ニて候間心掛ケて見申さはやと存る シテ出次第通行過て口伝 狂言節ノ上ニくつろく

されはこそ此御方の事ニて御座有ふする 先ツ御告の通り申さはやと存る いかに申候 此程の御願叶えて参らせふづるとの当社より我等まで御告の候 則チ其様躰ハ鉄輪の三ツの足にたいまつをたて頭にいた、きかほにハ二をぬり身ニハ赤キ衣をちやくしいかる心を御持あれと慥ニ夢想ニて候間此よし御心得候

へ
「イヤしかと其方の事て候　はやか様申内御かほのけしきがかわり恐し敷成り
て候間御うたかひなくいそぎ御用意被成候え

十九 紅葉狩

「折にふれて山々の紅葉多シといへと取分ヶ此辺り程色の能見事なハ御座ない程
に是にしばらく御逗留有ツて紅葉を御覽せられりうずる　然らハ爰にまくを
打チ廻し屏風を立ていそいで用意酒宴を（注7）はしめられ候えヤア　ト言うテ箆ノ上江クツ
ロク　ワキツレノ松江立案内ヲ乞ウ　其時立作り物の前立　「案内とハ誰ニテ渡り候ぞ　シカク
「是ハ此辺りの上臈達の紅葉を御覧候か亦あれに立たちたまいたるハいかよう
成人ニテ御座ぞ　シカク　「よし／＼其方ハ只々誰レニてもあれ　此方ハさる方
はかり御申候え　ツレ女ノ跡江付てマク江入　出立女常之通

（注1）最初に金偏を書いてから、「班」と書きなおしたか。

（注2）「た」の下一字衍字あり。

（注3）「馮」の下に「木」を書く。「憑」のつもりか。

（注4）脱字あるか。

（注5）脱字あるか。

（注6）脱字あるか。

（注7）脱字あるか。

Reprint of *Sagiryū ai-kakinuki* (1)

INADA, Hideo

